

という観念が、他のアジア地域より強すぎるほど投影しているのではないかと持とう。それは中国の老荘思想にはじまる「無為」という観念ともまたちがうもので、いわば「わが世誰ぞ、常ならむ」といった「いろは歌」にうたわれているような哀感をももった無常観につながる。インドモチベットも、また東南アジアの仏教も、もつとエネルギーが逆巻き渦巻くようなところがあ

るわけですが、日本ではそうしたエネルギーが逆巻き渦巻くようなところは、むしろ例外の方です。

せけんニけ・ゆいふあつせん

太子と馬子は、仏教によって国を治める。
鎮護仏教国家とつくもことをめざした。
公地公民・班田収授
は改められた。イ
シヤンにりくみす。国
司や郡司、馬馬や伝馬
戸籍や計帳は、このとき
の発案です。たはし、

無常観の展開●聖徳太子と伝えられる人物は「天寿國繡帳」の銘文に「世間虚仮・唯仏是真」と書きま

49(1)

「日乙巴」

れています。無常というものはたいへん速いということ、しかもずっと昔からその無常は継続して

大化の改新(645)と天智天皇(646)

古代の「官僚制」

有能だった聖徳太子が意外にも早く死んでしまい、そのあと蘇我氏がますます権勢をふるって、天皇の権威さえおびやかすようになっていきます。そこにおこったのが「大化の改新」です。蘇我蝦夷・入鹿の親子が、中大兄皇子と中臣鎌足のクーデターによって倒されていった事件です。中大兄皇子はそののちに天智天皇となつて、日本で初めて全国的な戸籍をつくったり、国を治めるための組織や法令を整えていきました。これはすべて中国の国づくりにならったもので、今日の日本の官僚制のよりなものでした。

半島動乱▼六世紀になると、しだいに新羅が強くなってきて、半島の突端にあった「加羅」を併合します。加羅は文書によつては「伽耶」とか「任那」となっており、以前の日本史の教科書では「任那の日本府」があったといわれているところですが、それが新羅に吸収されそうになったので、百済は日本に応援を求めた。この状況の変化は、中国に「随」と、それにづく「唐」という巨大な

このとき「天皇記」や「国記」
なびの「イナム・ドクマ」
が「火変」されわかれしてしまします。